

急性期病棟看護師の多職種連携実践能力を養成する教育の検討

学籍番号 194103 甲斐暁

指導教員 滝下幸栄

目的 研究目的は、急性期医療を提供する病棟で勤務する看護師の多職種連携能力および多職種連携教育の現状を明らかにし、その結果から今後の看護継続教育における多職種連携教育の方向を検討することである。

方法 対象者は京都府乙訓医療圏の高度急性期機能もしくは急性期機能を有しており、栄養サポートチーム加算等の多職種で患者に関わる基本入院料の施設基準を満たす 100 床以上の病院の急性期病棟に勤務する看護師である。調査期間は 2020 年 9 月～11 月。調査方法は質問紙調査を行った。調査内容は基本属性、多職種連携実践能力評価尺度 (Chiba Interprofessional Competency Scale : CICS29)、多職種連携の実践・経験、多職種連携教育の状況等を選択肢と自由記載にて問うた。分析方法は数値データでは全変数の記述統計量を算出した後、Shapiro-Wilk 検定で正規性の確認を行った。多職種連携実践能力 (CICS29) の総得点を従属変数、基本属性、多職種との交流機会、多職種連携教育の状況を独立変数として、Mann-WhitneyU 検定、Kruskal Wallis 検定を行った。最終的には、単変量解析で有意差が見られた変数を参考として、多重ロジスティック回帰分析 (変数増加法：尤度比) を行った。文字データは文脈の意味の類似性に基づき質的帰納的に分析しカテゴリー化した。

結果 226 名から回答を得た (回収率 52.8%)。有効回答数は 220 (97.3%) であった。看護師経験年数の平均は 10.4 ± 8.6 年であった。①多職種連携実践能力 (CICS29) の得点率が低かったのは「チームの目標達成のための行動」、「チーム運営のスキル」の下位尺度項目であった。②多職種連携実践能力 (CICS29) と関連があった項目は、主任等の職位の有無、専門資格の有無、多職種カンファレンス、電子カルテによる情報共有、多職種連携の学習機会の 5 点であった。主任等の職位がある者は一般スタッフよりも多職種連携実践能力が高かった。また、認定看護師などの資格を持つ者はそうでない者よりも得点が高い傾向であった。多職種カンファレンスの開催、電子カルテでの情報共有、職場での多職種連携教育が実践されているものは得点が高かった。③看護師が身につけたい学習内容は、「職種間コミュニケーション」、「多職種カンファレンスの持ち方」、「リーダーシップ」、「コンフリクトマネジメント」等であった。④多職種連携教育を受ける上で困難点としてあげたのは、「学習の場や機会の不足」、「業務繁忙による学習への負担感と時間の確保の難しさ」、「学習内容・方法の不明瞭さ」などであった。

考察 今後の急性期病棟で勤務する看護師に必要な多職種連携教育は、看護師が幅広い分野で活動する役割を担っていることを主軸として①多職種連携教育の内容は、チーム運営スキルやチーム目標管理、職種間コミュニケーションを促進する方法、多職種の業務・特性の理解等の項目を取り入れること、②教育の展開方法は、業務が繁忙である事に加え職種間調整が難しいことから、業務調整や教育環境の整備を行い集合研修等の機会を計画的に設定する事が必要、③多職種との交流機会が多いほど多職種連携実践能力は向上することから、OJT の機能を考慮しつつ、多職種カンファレンスの定期開催など連携を促進する対話機会や情報共有の充実を図ることが重要であることが示唆された。

結論 急性期病棟看護師の多職種連携実践能力は、継続教育の機会や多職種との交流機会に影響をうけており、教育環境を整備しつつ教育を展開していくことが重要である。

Key words : 看護師、多職種連携、CICS29、急性期病棟、継続教育

学位 (修士) 取得日 2021 年 3 月 6 日

乳幼児を養育する共働き夫婦における夫の家事・育児参加の実態と要因

学籍番号 194105 前田圭子

指導教員 松岡知子

目的 乳幼児を養育する共働き夫婦における夫の家事・育児参加の実態と要因を明らかにすることである。

方法 乳幼児を養育する共働き夫婦 443 組 886 名を対象に無記名自己式質問紙調査を行った。調査期間は 2020 年 8 月～11 月である。質問項目は年齢、家族形態、子どもの人数、就労形態、朴らの夫の家事・育児参加尺度、牧野の育児ストレス尺度、青木のパートナーからの役割期待尺度、梅田の育児協働尺度、Dreyer, N.A. の性別役割志向性尺度 (ISRO)、青木の仕事環境尺度である。調査協力の得られた夫婦ペアデータの 75 組 150 名を分析対象とした。各尺度は原法通りに点数化し、夫の家事育児参加各尺度及び下位尺度について、t 検定、一元配置分散分析、ピアソンの相関係数により分析した。有意な相関のあった項目について重回帰分析を行った。有意確率 5% 以下を有意差ありとした。倫理的配慮として、京都府立医科大学医学倫理審査委員会の承認を得てから実施した (ERB-E-455)。

結果 夫の家事育児参加が多いことと有意に相関していた項目は、妻が正規雇用である ($p<0.01$)、一日就労時間が長い ($p<0.05$)、育児休業取得経験がある ($p<0.05$)、育児支援者がいる ($p<0.05$)、妻と夫の育児ストレス尺度及び下位尺度が低い ($p<0.01$)、妻と夫のパートナーからの役割期待尺度及び下位尺度が高い ($p<0.05$)、妻と夫の育児協働感尺度と下位尺度が高い ($p<0.05$)、妻の家事育児参加尺度が低い ($p<0.01$)、夫の伝統的な性役割分業観尺度が低い ($p<0.01$)、夫の仕事環境尺度が高い ($p<0.05$) であった。有意な相関がみられた項目について重回帰分析を行った。その結果、乳幼児を養育する夫婦における夫の家事育児参加が多いことと関連していた要因は、「妻と夫の家事育児の公平性の調整が高い」($p<0.05$)、「妻の家事育児の効率性の追求が高い」($p<0.05$) であった。夫の家事育児参加が少ないことと関連していた要因は、「妻の家事役割期待が高い」($p<0.05$)、「妻の相談と共有が高い」($p<0.05$)、「夫の伝統的な性役割分業観が高い」($p<0.05$)、「妻の基本的家事参加が高い」($p<0.01$)、「妻の社会・仕事役割期待が高い」($p<0.01$) であった。

結語 夫の家事育児参加が多かった要因は、夫と妻の家事育児の公平性の調整が高い、妻の家事育児の効率性の追求が高いであった。夫の家事育児参加が少なかった要因は、妻のパートナーへの家事役割期待が高い、妻の夫婦での相談と共有が高い、妻の家事参加が高い、夫の伝統的な性役割分業観が高い、妻の夫への社会・仕事役割期待が高いであった。以上より、乳幼児を養育する共働き夫婦の夫の家事育児参加を促進させるためには、家事育児の公平性と効率性をもって家事育児を分担・調整できるように、夫婦の協働する意識を持つことが重要であることが示唆された。また、共働き夫婦の夫の家事育児参加を促し、妻が仕事と家事育児に負担なく両立できるように、夫婦関係の構築、父親教室やセミナーによる父親同士の交流や悩みの共有ができるような夫の子育て参加に向けた支援が必要であることが示唆された。

Key words : 共働き夫婦、夫の家事育児参加、育児協働感、役割期待、育児ストレス、仕事環境、性役割分業観

学位 (修士) 取得日 2021 年 3 月 6 日

母親が看護師である看護系大学の女子大学生の職業継承までの体験

学籍番号 194106 山内聡子

指導教員 關戸啓子

目的 研究目的は、母親が看護師である看護系大学に通う女子大学生の職業継承までの体験を明らかにすることである。

方法 研究対象者は、看護系大学に通う看護学生で3・4年生の女子学生であり、母親が看護師で、幼少時から継続して看護師（原則病棟で勤務）として働いている者とした。調査期間は、2020年4月から10月までで、半構成的面接法により、母親が看護師であることに関して、印象深いできごとや思い出を語ってもらった。分析には、クリッペンドルフの内容分析を用いた。語りから逐語録を作成し、語りを文脈上の意味を損なわない範囲で区切り、表現された意味に注意してコード化し、カテゴリー化した。

結果 研究協力が同意が得られた研究対象者は10人であった。幼少期の体験として、[母以外に世話してくれる人がある生活を送る] [母以外に一緒にいてくれる人がある生活を送る] [母がしてくれることは特別と感じる] の3つのサブカテゴリーから、カテゴリー【不自由を感じない生活】が抽出された。小学校低学年の時期の体験として、[母が仕事による迷惑を子どもにかけないようにしていることを知る] [母が看護師であることを初めて認識する] の2つのサブカテゴリーから、カテゴリー【母に守られる生活】が抽出された。小学校高学年の時期の体験として、[看護師としての素敵な母の姿を知る] [普通の家との違いを認識する] の2つのサブカテゴリーから、カテゴリー【母の仕事の影響をうける生活】が抽出された。中学校の時期の体験として、[母が看護師であることの心強さを感じる] [母の仕事への興味を持ち始める] の2つのサブカテゴリーから、カテゴリー【看護師の母へのあこがれ】が抽出された。[母も含めて生活での役割分担ができていく] [母は自分とのコミュニケーションを大切にしてくれる] の2つのサブカテゴリーから、カテゴリー【母から受ける心身両面からのサポート】が抽出された。高校の時期の体験として、[看護師として活躍する母の姿を知る] [看護師の仕事の大変さを知る] [看護師の仕事のやりがいを知る] [母が看護師になることを応援してくれる] の4つのサブカテゴリーから、カテゴリー【看護師を目指す決意】が抽出された。

考察 母親が看護職を継続できた周囲のサポートが存在し、幼児期や小学校の低学年では、母親が仕事していることの影響をあまり感じないで生活していたことがわかった。その後、徐々に母親が看護師であることによる影響を知り、母親が生き生き働く姿をみたりする機会を得て、看護師への関心やあこがれを高め、母親からの支援を受けて看護師を目指す決意をし、職業を継承していることが示唆された。

Key words : 母親、看護師、女子大学生、職業継承、体験

学位（修士）取得日 2021年3月6日

看護系大学生のコミュニケーション行動に影響を与える要因の基礎的研究 —属性・アルバイト・サークル活動に焦点をあてて—

学籍番号 194108 吉川由生子

指導教員 關戸啓子

目的 研究目的は、看護系大学生のコミュニケーション行動に影響を与える要因を明らかにすることである。影響要因の中でも、今回は属性・アルバイト・サークル活動に焦点をあてて、コミュニケーション行動へ与える影響について明らかにする。

方法 研究対象者は、看護系大学の1～4年生である。基本属性とアルバイト・サークル活動の有無、コミュニケーションの苦手感の程度及び廣瀬ら(2011)の「基本的コミュニケーション尺度」で構成した無記名の質問紙調査とグループインタビューを実施した。「基本的コミュニケーション尺度」は、【状況に合った行動】【かかわり行動】【集団参加】【人への関心】の4因子で構成されている。グループインタビューでは、アルバイトやサークル活動の経験が、普段や実習でのコミュニケーションに役立っていると思えることを語ってもらった。調査期間は2020年10月から12月までであった。

結果 質問紙は333人に配布し、268人から有効回答を得た。グループインタビューは4年生21人を4グループにわけて実施した。質問紙調査の結果は、要因の群別に因子別の因子得点平均値を比較した。学年間・家族の人数別の比較では、有意差は認められなかった。第4因子【人への関心】において、きょうだいがいない群の方が、いる群よりも有意($p=0.042$)に平均値が高かった。第3因子【集団参加】において、サークル活動を何かしている群が、何もサークル活動をしていない群よりも有意($p=0.007$)に平均値が高かった。第3因子【集団参加】において、スポーツ系のサークル活動のみを行っている群が、サークル活動を何も行っていない群よりも有意($p=0.047$)に平均値が高かった。どの因子においても、文科系サークル活動の有無による有意差は認められなかった。第1因子【状況に合った行動】において、日常生活のコミュニケーションに苦手意識のない群が、ある群よりも有意($p=0.040$)に平均値が高かった。第3因子【集団参加】において、日常生活のコミュニケーションに苦手意識のない群が、ある群よりも有意($p=0.015$)に平均値が高かった。第3因子【集団参加】において、臨地実習におけるコミュニケーションに苦手意識のない群が、ある群よりも有意($p=0.006$)に平均値が高かった。グループインタビューによる調査において、アルバイトもサークル活動も、学生たちはどちらも同じように「コミュニケーション・スキルの向上」と「対応能力の向上」につながったと述べた。

考察 看護学生は、状況や相手を配慮して言語行動をとることや自分の意思を示すことが難しいと感じていると考えられた。これらのコミュニケーション行動は、アルバイトやサークル活動によっても養われる可能性が示唆された。

Key words : 看護系大学生、コミュニケーション行動、アルバイト、サークル活動

学位(修士)取得日 2021年3月6日

クリティカル領域に配属された新人看護師の プロフェッショナリズム形成に影響した経験 — 『看護職の倫理綱領』を手掛かりに—

学籍番号 194102 出雲幸美

指導教員 吾妻知美

目的 クリティカル領域に配属された新卒看護師のプロフェッショナリズム形成に影響した経験を『看護職の倫理綱領』を手掛かりに明らかにする。

方法 研究デザインはエピソード・インタビューによる質的記述的研究である。データ収集期間は、2021年2月～2021年6月30日。研究対象者は、急性期一般病院のうち、ER・ICU・HCU・SCUや急性期外科系病棟などのクリティカル領域に新人看護師として配属され、生命の危機的状態（クリティカル期）にある重症患者に対してのケア実践領域に所属された卒後2年目看護師8名。分析は、①インタビューで得られたエピソードを逐語録に起こした。②文脈を重視しながら、意味のあるまとまりに区分した。③1文脈1単位とし、研究対象者ごとに、『看護職の倫理綱領』の項目に該当する語りを抽出した。④研究対象者の語りを別の対象者の語りと比較し、類似性や相違性について研究責任者と研究担当者で検討し、得られたすべての結果を意味内容の類似するものについてまとめ、抽象化してテーマを抽出した。⑤テーマ間での類似性と相違性を類別し、大テーマを抽出した。⑥抽出された文脈について『看護職の倫理綱領』の項目ごとに再分類した。

結果 研究参加者は8名（女性8名男性0名）。年齢は22歳～23歳であった。

8名のエピソードを分析した結果、看護者の倫理綱領に関連する文脈は、74文脈であった。74文脈それぞれの状況にネーミングを行い、類似性のある文脈を集約し、15のテーマを抽出した。さらに、【自分の看護実践体験を通じた学び】【先輩看護師の看護実践やアドバイスからの学び】【チーム連携や多職種連携への参加】の3つの大テーマが抽出された。また、『看護職の倫理綱領』の項目ごとに分類した結果、新人看護師がプロフェッショナリズムを感じたエピソードの語りには、『看護職の倫理綱領』の16項目のうちの14項目が含まれていた。

考察 新人看護師は、自分の看護実践体験や先輩看護師の看護実践および看護師間・多職種との連携等において、プロフェッショナリズム形成に影響する体験をしていた。その体験は、『看護職の倫理綱領』に合致（該当）し、『看護職の倫理綱領』に即してプロフェッショナリズムを形成していたと考える。

新人看護師へのプロフェッショナリズム教育のためには、急変場面や看取り場面を含めた経験と丁寧なリフレクション（省察）、モデルとなる存在、『看護職の倫理綱領』を用いて良いあり方を模索する職場環境、組織や施設全体がプロフェッショナリズム教育に適合できるような文化醸成を自然に作り上げることが重要であると考えられる。

Key words : プロフェッショナリズム、新人看護師、クリティカルケア領域、看護職の倫理綱領

学位（修士）取得日 2021年9月6日

慢性腎不全患者の倫理的困難とその対応 －高度実践看護師の視点から－

学籍番号 194107 山川京子

指導教員 吾妻知美

目的 高度実践看護師が行う、慢性腎不全患者の支援において、困難と感じた倫理的問題とその対応を明らかにする。

方法 調査期間は2020年10月～2021年2月。対象者は腎代替療法を実施している近畿の一般病院、特定機能病院の透析看護認定看護師1名、慢性腎臓病療養指導看護師7名である。エピソードインタビューによる質的記述的研究を行った。インタビューの内容は、①意思決定について困難と感じた場面について、どのようなことがあり、どのように感じられたか②その場面でどのように対応されたかである。インタビュー内容を逐語録に起こし記述し、文脈を重視し、「慢性腎不全看護における困難な場面の対応」に関連すると思われる看護師の語りを抽出し、データを「困難な場面」と「困難な場面への対応」に分類した。更に、同じ意味を持つ内容ごとに分類し、繰り返し見られる構成要素について検討した。また、データそれぞれの類似性と差異についても検討した。データの解釈と統合をくり返し、高度実践看護師が経験した「困難な場面」と「困難な場面への対応」について、それぞれにテーマおよび大テーマを抽出した。

結果 高度実践看護師が経験した困難は、【医療者中心の治療決定へのやるかたなさ】【療法選択における意思決定支援の困難】【救命できる患者の透析拒否への不全感】【家族の意思が優先されることへの疑問】【感情をぶつけてくる患者への対応困難】【安全な透析が行えない患者への困惑】【透析患者の在宅医療が進まないことへの諦め】【終末期患者の透析継続へのジレンマ】【他職種との意思統一の困難】の9つの大テーマと18のテーマが抽出された。また、困難への実践は【患者にとって最適な療法選択を支援する】【患者と家族の橋渡しをする】【多職種連携の推進役となる】【透析継続のために最善を尽くす】【看護師自身のメンタルヘルスを保ちながら援助する】の5つの大テーマと25のテーマが抽出された。

考察 高度実践看護師は、患者の支援における困難な場面に対し、ジレンマを感じながらも患者にとって最適な意思決定支援になるよう中心的役割を担っていた。患者家族の橋渡しのみならず、患者を支える一番身近な医療者として他職種と連携しており、他職種の思いも理解し患者支援につなげていた。さらに、困難な場面を経験し、内省することで倫理観を高めていたと考える。

結論 高度実践看護師は、看護職の倫理綱領に基づいた実践をしていた。高齢社会を迎え、これから更に複雑化していく社会情勢において、患者にとって最善を考え支援できる看護師の育成が重要と示唆された。

Key words : 慢性腎不全看護、高度実践看護師、倫理的困難

学位(修士)取得日 2021年9月6日